

主体的聴取活動を促す高等学校音楽科における 鑑賞領域の授業提案

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 甘利花音

1. 研究背景

2016（平成28）年12月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」において、学習指導要領等の改訂の柱として「主体的・対話的で深い学び」の実現が提唱された。それをうけ、教育現場では同視点に基づく授業実践が数多く展開されている。

筆者は高校生のか、音楽科「鑑賞」領域の授業において「音楽を聴かされている」という受動的な感覚を抱いた経験があり、この経験が主体的な鑑賞の在り方への問題意識の契機となった。一方で、今年度の授業観察を通して高等学校音楽科の授業を見た際には、生徒が主体的に活動しているように見受けられる場面も多く、必ずしも受動的な学習ばかりが行われているわけではないことも確認した。しかしながら、その主体性がどのような指導上の手立てによって成立しているのかについては、観察のみでは十分に把握することができなかった。

また、高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説・芸術（音楽・美術・工芸・書道）における「音楽Iの目標(3)」では、「主体的・協働的に音楽の幅広い活動に取り組み、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育む」ことが示されている。さらに「芸術科の目標(3)」の解説においても、生涯にわたり芸術を愛好する態度の育成が強調されている。これらの記述は、学習成果が授業内に限定されるのではなく、卒業後の生活においても継続的に音楽文化と関わる姿を視野に入れている点で重要である。しかしながら、生涯にわたる音楽愛好心の育成を目指すためには、授業内の受動的な鑑賞活動にとどまらず、学習者が主体的に音楽と関わるきっかけをいかに授業の中で形成するかが課題となる。

このように、授業観察からは生徒が主体的に活動している様子が確認できたものの、その主体性を支える具体的な指導手立てについては明らかではなかった。生涯にわたる音楽愛好心の育成という学習指導要領の内容を踏まえると、鑑賞領域において学習者が主体的に音楽と関わるための聴取活動をどのように構築するかについて、より詳細な検討が求められる。そこで本研究では、高等学校音楽科「鑑賞」領域において主体的聴取活動を促す授業の在り方を検討していきたい。

2. 研究目的

先行研究では、板垣（2012）が、「音楽の授業の中で、音楽との出会いに関わる印象深い感動体験ができるかどうか、生涯音楽を愛好していけるかどうかの大きな鍵である。」と指摘している。また、小林（2023）は、「音楽文化に対する理解を深めるためには、その場で鳴り響く音や音楽だけではなく、文化的・歴史的背景の視点から、音楽の特徴を捉えることが有効である。（中略）音楽鑑賞教育では、文化的・歴史的背景の視点から複数の音楽を比較することによって、それぞれの音楽のよさをより深く味わうことができるようになり、こうした学びの蓄積が、音楽文化を概念的に理解することにつながる。そして、音楽を文化として捉え、文化的・歴史的背景も含めて鑑賞するという、新しい聴き方が可能になる。」と述べている。

これらの知見は、音楽の授業において印象深い感動体験をいかに生み出すかが、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育む上で重要であること、そして主体的な聴取活動を成立させるためには、単に音を聴

くだけでなく、文化的・歴史的背景を踏まえた多角的な聴取が求められることを示唆している。

以上を踏まえ、本研究の目的は、高等学校音楽科「鑑賞」領域において主体的聴取活動を促す指導手立てについて、授業実践を通して検討・改善を行い、その教育的意義を明らかにするとともに、より効果的な授業の在り方を提案することである。

3. 研究方法

本研究では、まず授業実践前に事前アンケート調査を実施し、生徒の日ごろの聴取活動の頻度や実態を把握する。その結果を踏まえて授業を構想し、全4回の授業実践を行い、ワークシートの記載や授業中の発言発話などの分析から、量的質的定着度を測り、事後のアンケートで主体性の定着度を見る。

さらに、授業前後の変化や各回の学習過程を通して、生徒の聴取活動に対する姿勢がどのように変容したかを見取ることで、指導の手立てと授業構想を検討する。

4. 授業実践

(1)授業概要

本授業は、山梨県公立高校1年生を対象に、全4時間で「音楽Ⅰ」の西洋音楽の鑑賞領域を扱う。西洋音楽史の流れに沿って様々な作品を提示し、各時代における音楽の構造的な特徴や表現の変化を理解することを旨とする。最終回では、生徒自身が西洋音楽史の時代区分を手がかりに推薦曲を選び、音源とともにその根拠を仲間を紹介する活動を行う。さらに、授業前後にアンケートを実施し、生徒の意識や理解の変容を把握する。

(2)事前アンケートの実施

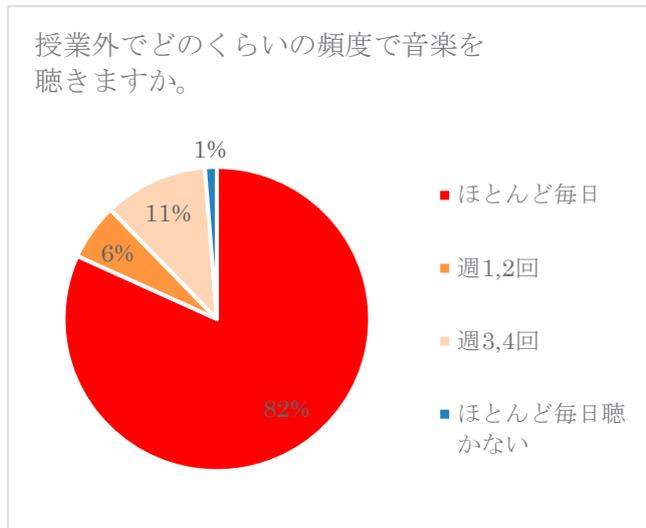


図1

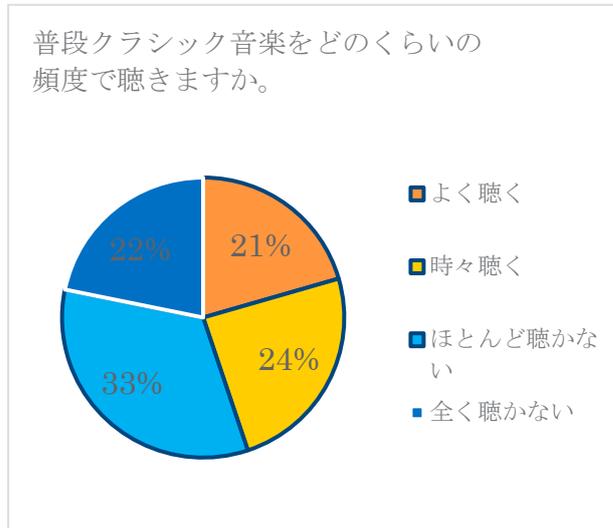


図2

事前アンケートは音楽Ⅰを履修している高校一年生80人を対象に行った。

図1と図2より、対象者の多くは毎日音楽に触れる習慣を持っているものの、聴くジャンルとしてクラシック音楽を選択している者は半数以下に留まっていることが明らかとなった。このことから、「音楽を聴く習慣」の有無と「クラシック音楽」の間には乖離があり、クラシック音楽を日常生活の中で聴いているのは、特定の層であると推察された。

また、生徒が授業外で聴くジャンルとして多いものは何かを明らかにするため、ジャンルについてのアンケートも実施した。(次ページ図3)

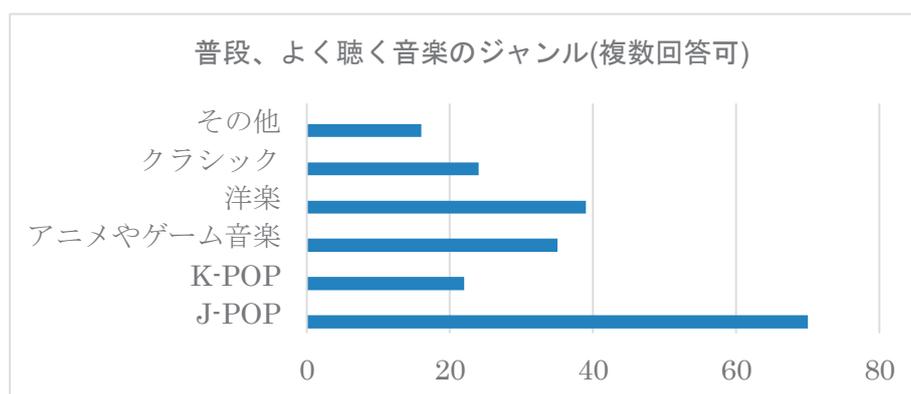


図3

授業外で生徒が普段聴いている音楽ジャンルについては、図3に示す通り、J-POPが最も多く、次いで洋楽、アニメ・ゲーム音楽が挙げられた。K-POPも一定数の回答があり、ポピュラー音楽が中心であることが分かる。一方、クラシック音楽を選んだ生徒は他のジャンルに比べると少なく、授業外における聴取の機会が限られていることが明らかとなった。

そこで本授業では、西洋音楽史に沿ってクラシック音楽を鑑賞する機会を設け、各時代における音楽の特徴や表現の違いに着目できるよう構成することで、さまざまな音楽に触れ、それらに興味関心をもつことができるようにという目的をもって実践を行った。

(3)授業内容

全4時間の学習のうち、初回では「時代ごとの音楽の特徴を聴き取ろう」というめあてを生徒に提示し、中世からバロック時代にかけての楽曲を比較鑑賞した。取り上げた楽曲は、《Kyrie》(グレゴリオ聖歌)、《Sederunt》(ペロタン)、《Ave Maria》(ジョスカン・デ・プレ)、オペラ『リナルド』より《Lascia ch'io pianga》の4曲である。授業では、ネウマ譜を配布したほか、通模倣様式に気づけるよう楽譜を提示して視覚的な理解を促した。また、生徒が各時代の音楽の特徴を主体的に聴き取れるように、ペアやグループでの対話的な活動を多く取り入れた。

第2時間目も同様の構成で授業を展開した。この回では、古典派とロマン派の楽曲を用いて比較鑑賞を行った。取り上げた楽曲は、《ピアノソナタ 第16番 ハ長調 K.545 第1楽章》(モーツァルト)と《ノクターン第2番 変ハ長調 Op.9-2》(ショパン)である。授業の導入として、前時に扱った時代の楽曲を提示し、音楽の特徴から時代を推測する活動を行った。具体的には、《Kyrie》(パレストリーナ)、「四季」より《冬》(ヴィヴァルディ)、「Agnus Dei VIII from Mass VIII」(グレゴリオ聖歌)の一部を聴取させた。この導入により、生徒は前時の学習内容を振り返ることができる。それに加え、音楽に触れる時間が増えることによって「このような音楽もあるのか」「もっと聴いてみたい」という探究的な姿勢を引き出すことを目的とした。その後、古典派とロマン派の比較鑑賞の授業にうつった。両時代の楽曲をいずれもピアノ演奏の作品に統一したのは、様式の違いをより明確に聴き取れるようにするためである。オーケストラ作品も検討したが、楽器編成が多様であるため、生徒が着目すべき特徴を捉えにくくなる可能性がある。そこで本授業では、ピアノ曲に限定し、同一楽器による演奏を比較させることで、古典派とロマン派の表現内容の質をより明瞭に把握できるようにした。

また、知覚と感受の結びつきを深めるため、板書は生徒自身が完成させる形式をとった。感じ取ったことを理由とともに可視化することで、知覚したことと感受したことが明確になり、他者の記述から学ぶ機会も増えると考えられる。

第3時間目も授業の進め方は第2時間目と大きく変えず、近現代の音楽に触れた。導入として時代当てクイズを行い、《愛の夢》(リスト)、《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》(モーツァルト)、《弦楽セレナーデ》(チャイコフスキー)、《交響曲第45番》(ハイドン)を取り上げた。前時ではピアノ曲のみを扱ったため、他の演奏形態にも触れられるよう、これらの曲を選定した。

授業の展開としては、近代の楽曲として《春の祭典》第2部第6曲「生贄の踊り-選ばれた乙女」(ストラヴィンスキー)を鑑賞し、続いて《4分33秒》および Sonatas and Interludes より《Sonata V》(ジョン・ケージ)を扱い、ジョン・ケージに関する映像(星野源「おんがくこうろん」)も視聴した。さらに、《モーターバイク協奏曲》(フォルケ・ラーベ)の一部を鑑賞し、これまでの時代とは音楽の捉え方が大きく変化していることに気づけるよう教材を構成した。バラエティ番組を効果的に活用したことで、近現代の音楽にも親しみをもって向き合うことができたと考えられる。

第4時間目は、これまでの3時間で鑑賞した各時代の音楽の中から、生徒自身が「推し曲」を選び、他者に紹介する活動を行った。音楽科では授業外での課題が課されることは多くないが、あえて推し曲を授業外で探すという課題を生徒に与えた。これにより、授業外でクラシック音楽に触れる時間が増え、未知の作品に出会うことで「音楽の価値を再発見する機会」を創出することをねらいとした。課題には1か月の期間を設け、生徒の負担が過度にならないよう配慮した。

授業では、家庭で見つけてきた推し曲を仲間に紹介し、グループでその曲を鑑賞する活動を行った。また、「Padlet」というツールを活用し、クラス全員の推し曲を一覧化して共有することで、互いの選曲をすぐに聴くことができる環境を整えた。(図4)



図4

また、こちらのツールはQRコードを読み取るだけでアクセスできるため、スマートフォン等から手軽に音源を聴くことができる。他者の投稿を閲覧でき、簡単に音源を聴くことができることから、普段音楽を聴くときと同様の感覚で活用できる点も利点である。

以上のように、全4時間を通して授業実践を行った。

(4)授業事後アンケートの分析

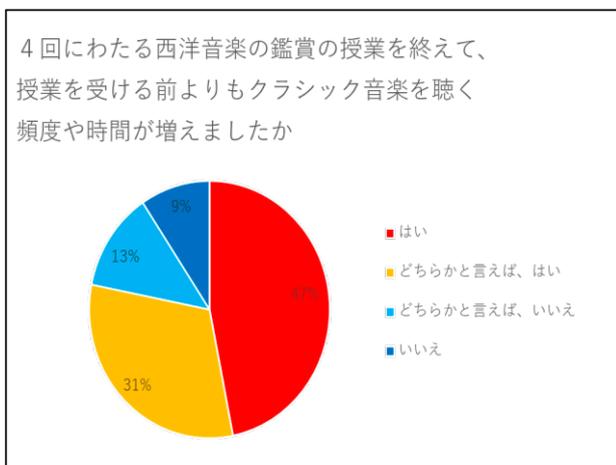


図5

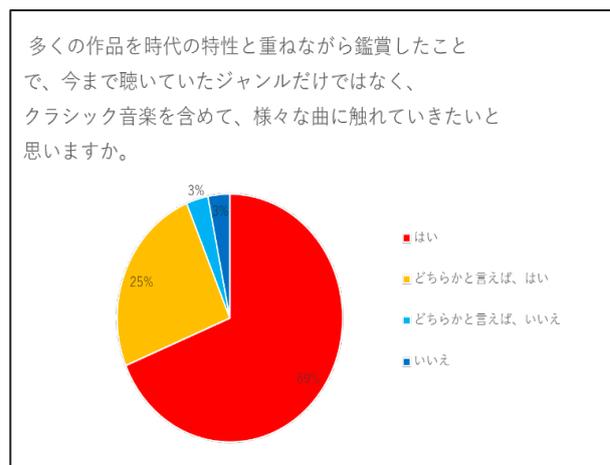


図6

全4時間の授業実践を経て、生徒の聴取活動の実態および意識に変容が生じたかを確認するため、実践から1か月後に事後アンケートを実施した（回答者数64名）。

「授業を受ける前よりもクラシック音楽を聴く頻度や時間が増えたか」という設問について分析する。調査の結果、肯定的な回答（「はい」「どちらかと言えば、はい」）が全体の78%に達し、そのうち「はい」と断定的に回答した生徒は47%に上った。事前アンケートにおいて、クラシック音楽を日常的に聴く生徒は多くはなかった実態を踏まえると、この数値は極めて有意な変容を示していると言える。

次に、「多くの作品を時代の特性と重ねながら鑑賞したことで、様々な曲に触れていきたいと思うか」という設問についてである。その結果、94%（「はい」69%、「どちらかと言えば、はい」25%）という、非常に高い肯定的な回答が得られた。

本実践では、ただ楽曲を聴くだけではなく、文化的・歴史的背景を伝えながら、たくさんの曲を比較して鑑賞を進めてきた。それにより、初めて聴く曲に対しても、既習知識を基にし、「自分なりの視点」をもって鑑賞する経験ができた。この「自分で音楽の特徴の変化に気づけた」という実感が、今後いろいろな音楽を聴いてみたいという意欲につながったのではないかと考えられる。

「はい」「どちらかと言えば、はい」と回答した理由(一部)

今までは自分の好きなジャンルの音楽しか聴けなかったけど、授業で初めて聴いた曲の中にも好きだと思えるものに出会えたから。

様々な曲に触れることで、音楽の魅力をもっと知りたいと思ったから。

自分の思っていた以上にそれぞれの良さがあると感じたからです。

価値観や視野が広がったと思ったから

クラシックはお堅いイメージで手が出しにくかったご、それぞれの分類や特徴を知ったことで新たなジャンルに挑戦する勇気や、期待感を感じたから。

図7

図7は「はい」「どちらかと言えば、はい」と回答した生徒の自由記述である。これらの記述から、生徒たちが単に知識を得ただけでなく、自身のまだ知らなかったジャンルに触れてみたいという好奇心を引き出すことができたのではないかと示唆される。また、様々な音楽に触れる中で、好きだと思える音楽に出会える経験をできたことで、授業外での聴取活動につなげることができたとも言える。

このことから、自分自身の価値観を広げる経験をするからこそ、生涯にわたる音楽を愛好する心を支える原動力になると考察する。

また、「押し曲紹介」についてもアンケートを取り、こちらも分析を行った。(図8)

4時間目の活動に関連して「押し曲を自宅で探したことで、クラシック音楽をもっと聴いてみたい、知りたいという気持ちが増したか」という設問である。その結果、肯定的な回答が計88%（「はい」49%、「どちらかと言えば、はい」39%）となり、約9割の生徒が前向きな回答をしている。

あえて授業外で「押し曲を探す」という課題を設定したことで、生徒たち自身が主体的に音楽に触れる機会を創出することができた。また、「Padlet」というツールを活用したことにより、他者の投稿を手軽に見ることができたことで、未知の作品に出会う手助けとなり、生徒が音楽に触れるきっかけとなった。

押し曲を自宅で探したことで、クラシック音楽をもっと聴いてみたい、知りたいという気持ちが増しましたか。

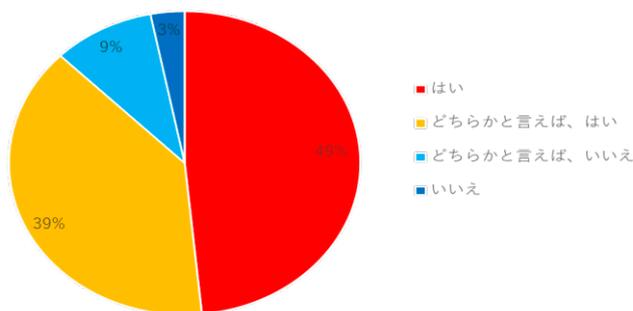


図8

(5)結果と考察

全4時間にわたる授業実践を通して、生徒のワークシートおよび学習過程を分析した結果、以下の点が明らかになった。

(1) 多様な楽曲に触れることで主体的聴取を促すこと。

生徒は、時代や様式の異なる複数の楽曲を比較しながら鑑賞することで、音楽の特徴を自ら見だし、価値づけようとする姿勢が見られた(図9・図10)。そして、文化的・歴史的背景を踏まえた多角的な聴取活動は、単なる受け身的な鑑賞ではなく、主体的な聴取へとつながることが確認された。

また、授業後にクラシック音楽を聴く頻度が増加した生徒が多かったことから、多様な音楽に触れる経験が授業外での聴取活動に影響を与える可能性があることが示唆された。

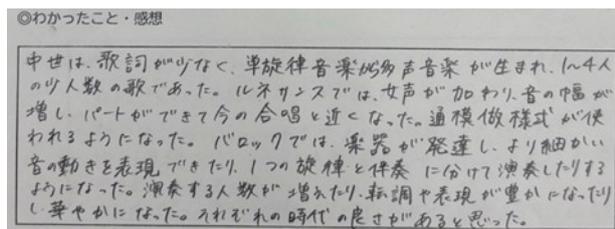


図9

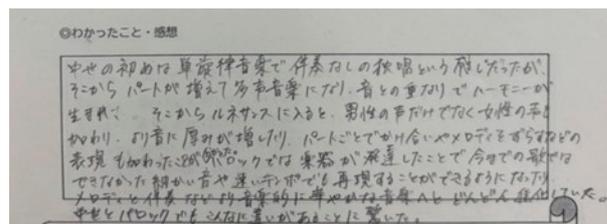


図10

(2) 「押し曲紹介」のような活動を組み込むことで、生徒が音楽に出会う経験を増やせること。

授業外でクラシック音楽を探するという課題は、生徒が自ら音楽を選び、未知の作品に出会う機会を創出した。また、今回は共有するときのツールとして「Padlet」を活用したが、とても有効的に機能した。SNS と同じような感覚で他者の投稿が見られるため、気軽に開くことができる。活用方法も様々で、多領域の学習への汎用も可能であると考えられる。

(3) 鑑賞領域における対話の有効性

授業では、ペア・グループでの対話活動や、生徒自身が板書を完成させる活動を取り入れた。これにより、生徒は自ら感じ取った特徴を言語化し、他者の視点と比較しながら理解を深めることができた。また、他者の意見に触れることで、自分では気づけなかった音楽の魅力に気づく場面も多く見られ、学習の広がりが生まれていたようにみとることができる。

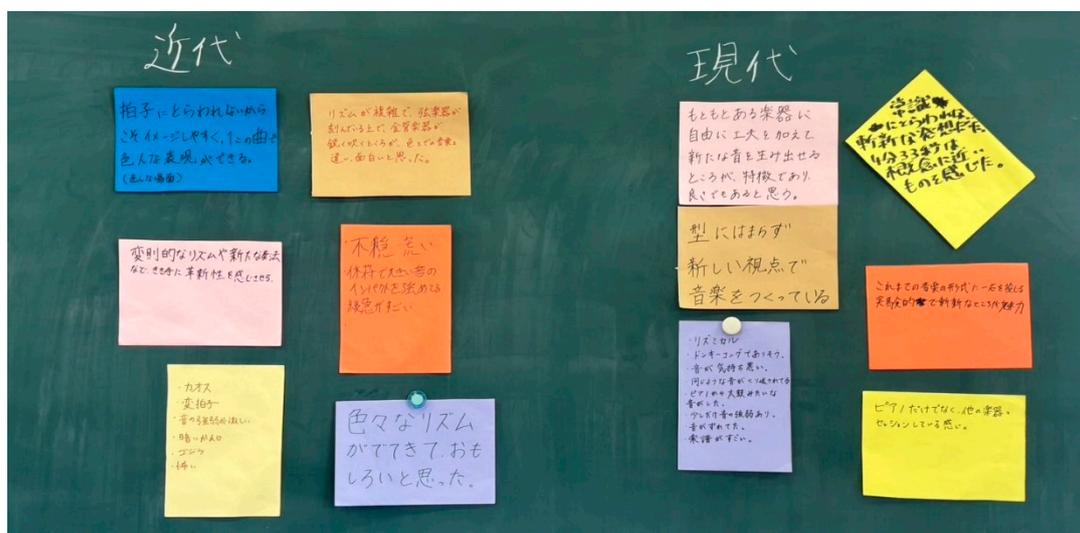


図 11

一方で、いくつかの課題も見られた。まず、選定する映像によっては生徒が特徴に気づきにくい場面があり、映像の扱い方には工夫が必要であると感じた。また、比較鑑賞を行う中で、形式や構造のみに意識が向きすぎてしまい、音楽の質的な部分に十分触れられなかったこと(図 12)も課題として挙げられる。

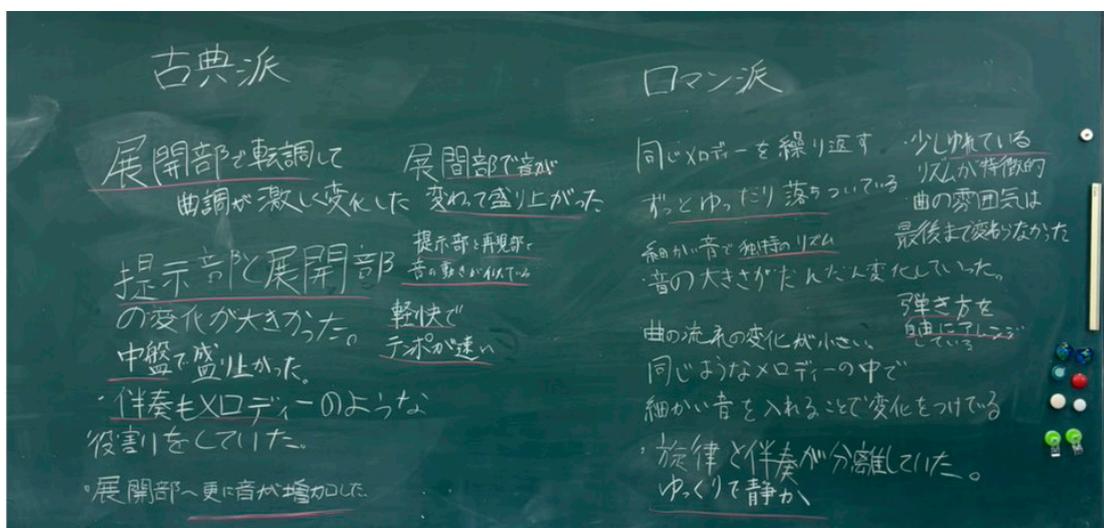


図 12

5. 結論

本研究は、高等学校音楽科「鑑賞」領域において、学習者が主体的に音楽と関わるための授業の在り方を検討することを目的とした。全4回の授業実践を通じた分析の結果、主体的聴取活動を促すためには、まず授業内において可能な限り多様な楽曲に触れる機会を確保することが肝要である。その際、特に西洋音楽の鑑賞においては、歴史的な枠組みの中に楽曲を位置づけ、複数の作品を比較鑑賞させる手立てが、音楽の特徴を構造的に捉える上で極めて有効であることが明らかとなった。

さらに、個々の鑑賞を単なる一時的な体験で終わらせるのではなく、他者との対話や共有の場を設けることで、楽曲や時代様式の持つ良さを再発見し、自ら価値づけを行うプロセスが重要である。このような歴史的背景に基づいた多角的な聴取と、対話を通じた価値の再構築こそが、学習者の主体性を引き出し、授業外での自発的な聴取行動や生涯にわたる音楽を愛好する心情へと繋がる基盤を形成するものと考えられる。

さらに、本研究での成果は、ICTツールを活用した「押し曲紹介」という活動が、授業内の学びを日常生活へと接続させた点にある。事後アンケートにおいて約8割の生徒にクラシック音楽の聴取活動における変容が見られたことは、学習者が自ら音楽を選択し、他者に共有するという経験をすることで、音楽を「自分事」として捉え直した結果であると解釈できる。これは、学習指導要領が掲げる「生涯にわたり音楽を愛好する心情」の育成に向けた、一つの有効な実践モデルを提示したと言える。

一方で、音楽の構造的・形式的な側面への注視が先行し、その根底にある音楽の表現の質の受容が十分に行われなかった点は、今後の課題として残された。

今後は、質的な聴取活動を促すための問いの精緻化、映像・音源提示の方法改善、さらには対話活動の質を高めるための方法の検討をしていく必要がある。これらを踏まえ、主体的聴取活動を促す鑑賞指導の在り方を、引き続き探究していく所存である。

○. 参考・引用文献

- ・板垣和子(2012)「音楽を愛好する心を育てる授業づくり—作曲・鑑賞の題材を通して—」『山梨大学大学院教育実践研究科年報』3, p. 218 - 221
- ・小林史子(2023)「音楽鑑賞教育に求められる文化的・歴史的背景への視点—ヨーデルを事例とした考察—」『玉川大学芸術学部研究紀要 2023』pp. 47 - 56
- ・文部科学省(2016)「2016(平成28)年12月の中央教育審議会答申」『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』
- ・文部科学省(2017)『平成29年度 高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 音楽編 美術編』